

再び「論争のすすめ」

理事長 松野太郎

これで4回目の巻頭言となりました。最初、広く全学会員の関心事について書けないので、とことわって自分に身近かな問題についての考えを述べましたが、結局そこから抜け出せません。今回は専門研究者とその卵の人達に向けての発言にとどまるのを許して下さい。(あと僅かで大学教授生活を終えますので。)

昨年もっと議論をしようと呼びかけ、そこで若い研究者が議論をする事を余り好まないのではないかという心配について述べました。この問題をもう少しさかのぼって(あるいは別の角度から)考えてみたいと思います。まず気になる事は、そもそもシャープな議論や対立する意見を生み出すような研究をしていないのではないか、という点です。すなわち、学界で或る程度確立した考えや事実をもとに、それを発展させたり、他の事例について調べたりする作業的研究はするが、既成の考えや事実疑問の目を向け、それを「たたく」ような研究や沢山の質問を呼ぶような新奇な研究、つまり「論」を立てる研究が少ないのではないのでしょうか。勿論、改良・応用型の研究はあるのが当然だし、ある程度多数にのぼるのも自然な姿かもしれませんが、異論・新論がもっと増えた方が「研究」の本性から言って健全だし、第一その方が面白いと思うのですが。「そうは言っても、その種の研究はリスクが大きくてできない。論文を書かないと就職に差し支えたり、研究費が貰えなくなったりするではないか。」という反論がすぐに出て来そうです。確かに現在の評価システム(あるいはその運用)[†]が改良・応用型の研究を増やす方向に働いていることは否定できません。しかし、同時にその影響もあって、研究者自身の持つ研究の動機が、「学界の先端に行く仕事をする」という方向に傾き、「何かを不思議に思っるとにかく考え、自分自身でわかりたく思う」という研究の本来の姿から離れている事

も、異論・新論を生み難くしている原因のように思います。

昨年、「同意の技術」という語を引用して述べましたが、近年の風潮として、人の意見に異を唱えることの価値が下がっている(マイナスとなっている)という事も研究の世界にとっては深刻な事態です。先に述べた事と分離できませんが、自分の考えを持つには、既製の他人の考えを疑い、反対する事が何より重要です。よく言われるように、日本の社会の特質はコンセンサスの重視ですが、研究にとってこれ程有害なことは無いように思います。20年以上前になりますが、アメリカから来た研究者が、アメリカ人は fighting each other だが日本人は close to each other だとの感想を述べました。丁度その頃読んだ本で、西洋史の木村尚三郎氏が「欧米人は戦う中に生きているが、日本人は共感の中に生きている」と全く同じ事を述べておられたので強く印象に残っています。このような日本社会の特質は、長い歴史の中で育かれたもので、どうしようもないものと思われるかも知れませんが、必ずしもそう言い切れません。私の体験からしても、他の人の書いているものから見ても、このような風潮が強まったのは1970年代以降の事です。それまでは、世間一般はともかく少なくとも大学とか研究者の社会では、異論を唱えること、議論を戦わすことは、最も大事であり美風であると考えられていました。実際、気象学界(学会)でも、いくつか思い出すような論争がありました。しかし、その後、経済的繁栄が進むにつれ、均質で摩擦の少ない日本社会の特質が経済的成功の鍵であり、優れた点であるとの主張が強まり、それが理由なく大学・研究者社会にまで浸透して来たように思います。それが今、普通の社会においても「日本型システムの弱点」として論じられ、それからの脱却が説かれています。もともと、それと無縁のはずの研究コミュニティにおいては言うまでもない事です。

とにかく、活発な論争のある学会を実現しましょう。

[†] 論文多数主義、国際誌尊重さらに根本の問題としてレフェリー制(同一レベルの仲間の評価)。